特集

授業びらきのアイデア

年度の最初の授業は、児童生徒が一年間学習に取り組んでいく意欲や態度を形成する大切な時間となります。国語科の授業びらきにはどのような方法があるのか、さまざまなアイデアを紹介します。

言語活動を楽しむことの実感と期待

兵庫教育大学
吉川　芳則

はじめに

一口に年度初めの国語科の授業と言っても、いろんなケースがある。小学校一年生は、やはり特別である。持ち上がりの学級と新しい学級とでも意味合いが違う。中学校では、学級替えがあっても、教師が学年を持ち上がれば、同じ国語の先生の授業の継続ということにもなる。また、授業びらきという場合、まさしく最初の一時間を指すのか、第一教材（単元）を学習する間を指すのかによって捉え方が異なる。（本稿では最初の一時間を授業びらきの時間として捉えることにする。）

いずれにしても、教室が変わり、新しい教科書、買い換えたノートを机の上に置いてのスタートである。国語は苦手だ、好きではないという思いを引きずっている子も、新たな気持ちで授業に臨むことができる数少ない機会となる。

以下では、そうした思いに応える授業づくりの観点を言語活動の楽しさを実感すること、言語活動への期待を持つことに求めてみる。

声を出す、響かせる

楽しさを実感させる言語活動として、まず声を出すことに取り組みたい。自己紹介のスピーチで、ということも考えられるが、できるだけ多くの児童生徒に機会を保障するという点で音読がよい。投げ入れ教材を用いてもよいが、新品の教科書が目の前にある。冒頭に配置されていることが多い詩や文学教材を使うようにする。

書かれていることばのおもしろさ、豊かさは、声に乗せて表出してみて感じ入ることが多い。まずは一人で声に出して読んでみる。意味のわからないことばがあれば予想し合ってもよいが、さっと教えてやればよい。書かれていることばを声に出すこと、教室に読み声が響くこと、ことばの響きを自分たちの耳で確かめることを大事にしたい。

ペアで一文（一段落、一連）ずつ交互に音読すること、グループで順番に音読することも、新しい友達、旧知の仲間の一学年進級した声を感じる場として意味がある。

一斉音読も積極的に取り入れる。はじめは小さな声であったり、不揃いであったりするだろう。それでも教師もいっしょに読んでリードする。揃ってきたらほめる。集団によ

るボリュームある声の響き、心地よさは、学校でないと経験できない。今後の音読活動への期待がわく。

グループごとに、どこをどのように読むか相談させ、ミニ群読のようになってもおもしろい。仲間といっしょに協力して言語活動（音読）をする。声を響かせる。そのことの楽しさを感じ取らせたい。

短作文としての書くこと

書くことは苦手だ、面倒だと思っている児童生徒は少なくないだろう。そんな子どもたちに「これからの国語科授業では、気楽に、簡単に鉛筆を動かしながら、書くことのおもしろさ、よさに触れていくようにするよ」というメッセージを送るようにする。短作文としての書くことの導入である。

短作文というのは、一語、一文、二文、一段落、そして二〇〇字程度までと幅はあるが、量的に短い書くことを言う。学習者にとっては負担が軽く、長い作文を書くことの土台作りとしても機能する。

例えば、第一教材の詩や文学教材を読んで、読後の感想を書くとする。ここで長々と書かせたのでは「また今年もか…」ということになりかねない。そこで短作文の発想を借りて「読んだ感想を一語で書いてみよう」というふうにする。どうしてその一語にしたのか、理由を一文（一行）で書いて付け足しておく、ということになってもよいが、それは付録。あくまで「一語で」にとどめておく。

一語で書きにくい子には、二語になっても、一文で表すことになっても認めるようにする。気軽に書く、ちょっと書き留める。その感覚がいいことなのだと伝え、取り組みやすさに気づかせたい。

短作文とはならないかもしれないが、物語（詩）の中で心に残った（気に入った、好きな）ことばを一つ（二つ）選んで、ノートに書いておく。こうした形での感想を書くことも簡単にできて楽しい。いずれも読むことと書くことを関連させた言語活動である。

話して伝える

右に述べた短作文として書いたことは、隣の子に、グループの子にどんどん話して伝えるようにする。なぜそういうことを考えて書いたのか、理由を話すということになる。席を立ってもいいから、五人の友達に話してあげようという活動にすることもできる。

本来、思ったことや考えたことをおしゃべりするということは、楽しい活動である。国語科の授業にもどんどん取り入れて、多様な考え、発想が生まれる機会、場とすることが望まれる。まして最初の授業でもある。気楽に友達に話して伝える、相手の考えを聞いてあげる場を設定し、伝え合うことの楽しさを感じさせる時間にしたい。

読んだこと、考えたこと、書いたことは、互いに伝え合い、情報交換して、また自分の考えに生かしていく。そういうことを楽しみながら行う国語科授業になるという予告を、話して伝える言語活動を実際に経験させる中で行うようにする。

おわりに

スタートの授業ということで、特別プログラムを設定して児童生徒の興味をひくことも考えられてよい。

しかし本稿で述べたのは、国語科の授業では話す・聞く、書く、読む言語活動を楽しく、学級のみんなといっしょに行っていくことになるという今後の授業の基本方針を実感させ、期待を持たせる、オリエンテーションの性格を持った授業びらきである。

押しつけず、子どもたちに気づかせるというスタンスを大事にしたい。

きっかわ　よしのり　兵庫教育大学教授。国語教育探究の会事務局長。説明的文章領域を中心に、学習活動の構成と展開のあり方について研究している。